



大変興味深いニュースが流されました。先程来日されたキューバ前駐米大使のホセ・カバニャス氏に、NHKがインタビューしたものです。日本 AALA は独自にウェブ講演会を開催し、AALA ニュース 142 号に内容を掲載しております。詳しいことが知りたい方はぜひお立ち寄りください。

NHK ニュース

2023 年 9 月 1 日 午後 5:14 公開

グローバル・サウス キューバ前駐米大使に聞く

国連総会(2月)

ロシア軍の即時撤退などを求める決議案

賛成	141	反対	7	棄権	32
----	-----	----	---	----	----

北朝鮮 エリトリア マリ ニカラグア シリア など

キューバ インド イラン 南アフリカ ベトナム など
--

ロシアがウクライナに軍事侵攻を開始して1年半が過ぎました。今回の特集では、終わらない戦争の背景に迫ります。多くの要因がありますが、このうち、グローバル・サウスの動きに注目します。



ことし2月の国連総会では、ロシア軍に即時撤退などを求める決議案が、欧米を中心に多くの国が賛成して採択されましたが、少なくない数のグローバル・サウスの国々が反対や棄権を表明。欧米とは一線を画する姿勢を続けています。



そうした国のひとつ、キューバにて、9月に「77 개국グループプラス中国」の首脳会議が開催されます。このグループは、1964 年に 77 の途上国などで発足し、今では 130 か国以上がメンバーで、いわば、グローバル・サウスの国と地域が集結する枠組みとなっています。

来日したキューバの前駐米大使で、現在はキューバで国際政治を研究するホセ・カバリーニャス氏に話を聞きました。

(「キャッチ！世界のトップニュース」で 8 月 28 日に放送した内容です)



別府キャスター： グローバル・サウスの存在感がいま、増しています。ウクライナ侵攻を非難する決議案に、その多くの国が賛成しないのはなぜですか？

カバーニャス氏： キューバは国家間での武力行使を支持しません。しかし、過去の経緯を考慮することも重要です。今、東ヨーロッパで起こっていることについては様々な見方があります。そのひとつが、「この衝突はいつ始まったのか」ということです。



カバーニャス氏： キューバの研究者たちは『NATO とロシアの対立』と呼んでいます。この戦争は去年（2022年）2月に始まったと考えられていますが、2008年、そして2014年にあの地域で起こったことを考えてみてください。アメリカの研究者でさえ、NATO がロシアの近くまで部隊を展開したことは間違いだったと指摘する人がいます。そのことを考えれば、この衝突に対して違った見方ができるでしょう。



別府キャスター：明らかに、他国による武力行使がウクライナ領内で行われています。国連の事務総長は、こうはっきりと述べています。「ロシア領内にウクライナ兵はいない一方で、ウクライナ領内には多くのロシア兵がいる」。ロシアがウクライナでしていることを、それでも非難しませんか？

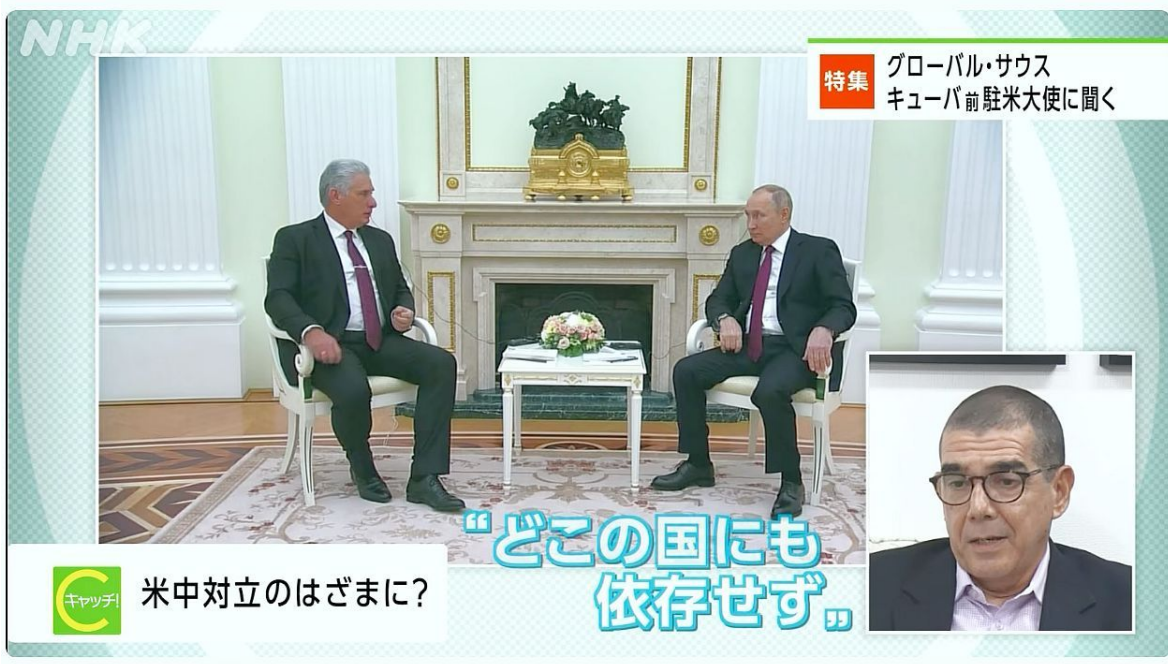
カバニャス氏：キューバは外交方針の原則として武力行使を支持しておらず、当初から多くの国々と共に平和的解決を求めてきました。NATOは交



渉する機会を提示することなく、武器の供与を続けていますが、これは間違っているというのがわれわれの考え方です。

米中対立のはざまに？

別府キャスター：「キューバに中国の情報収集施設がある」とのアメリカの指摘をどう考えますか？



カバーニャス氏： 人々にはそうした発言の出どころを探ってほしいものです。こういった話は、「キューバにいるアメリカ人外交官を音響兵器で攻撃している」という言いがかりや、「ベネズエラにキューバの部隊が駐留している」といった類の話と同じです。事実無根でした。話をでっち上げ、キューバを悪者に仕立て上げることで、キューバの対外関係を制限する人々は、アメリカに一定数いるのです。



別府キャスター： 米中のパワーゲームに利用されていると感じませんか？

カバーニャス氏： アメリカはそうしたことを何度も試みてきましたが、キューバは独立国です。自国の問題への対処法を知っています。長年にわたる敵対国との対立、友好国とさえも意見の相違がありました。しかし、キューバには独自の外交があり、どこの国にも依存していません。

高まる核の脅威をどう見る



別府キャスター： キューバの専門家に今こそ伺いたいと思っている質問があります。ミサイル危機、いわゆる 62 年のキューバ危機に強い関心を持ってきましたが、現在のウクライナ情勢において核戦争になるおそれはあると思いますか？



カバーニャス氏： ヨーロッパ各地に核兵器が配備されている現状、そして使用を決断する可能性のある人も多数いることを考えると、もちろん核のリスクはあると思います。誤って使用してしまうこともあるでしょうし、それに対して報復がある可能性も十分ありえます。

われわれは常に、キューバ危機当時の出来事や、核兵器の使用をどうやって防いだのか、そして平和を維持するために交渉することの大切さを振り返っています。



別府キャスター： インタビューで、カバーニャス氏は、アメリカを始め、NATO への強い不信感を語っていました。ロシアの軍事侵攻を明確に非難しないというキューバの立場の背景には、こうした西側への強い不信感があるように感じました。

その一方で、カバーニャス氏は「武力の行使は支持しない」とも話していて、そういう意味では、キューバの立場には矛盾があるのではないかとインタビューで聞いたわけですが、やりとりはかみ合わなかった、という印象を持ちました。

別府キャスター：ただ、はっきりしているのは、カバーニャス氏が説明するキューバの立場は、世界では決して例外的な少数派ではなく、グローバル・サウスの多くの国々など相当数に上っているということです。

軍事侵攻が長期化する中、日本を含むグローバル・ノースが、サウスの国々と向き合っていく上での難しさが改めて浮き彫りになっているように受け止めました。

終わり